

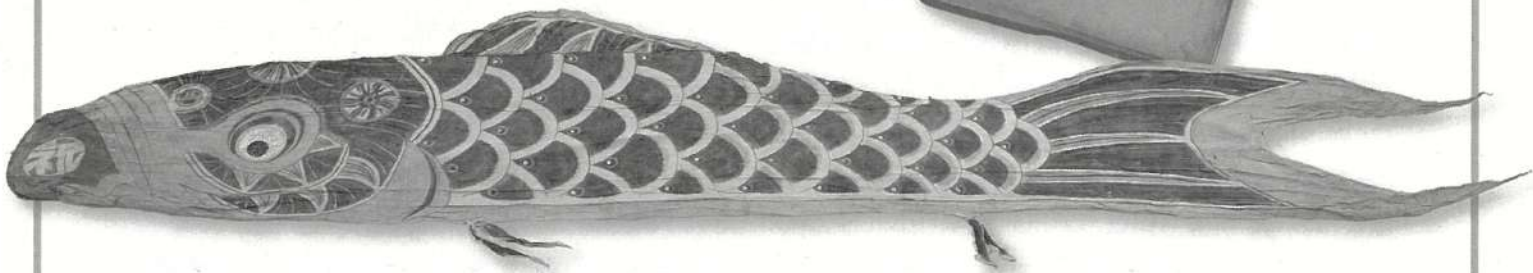


武蔵野ふるさと歴史館だより

第12号

収蔵資料紹介 11

榎本家の「鯉のぼり」



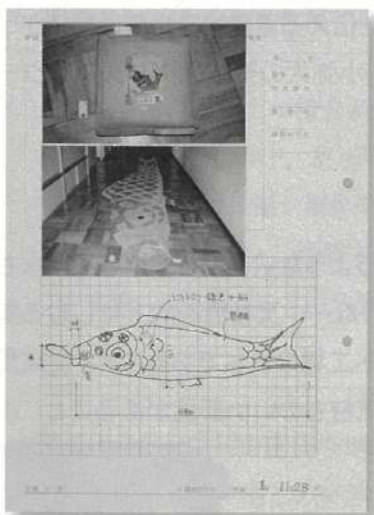
端午の節供関連資料の中から武蔵野市緑町の榎本家より寄贈を受けた「鯉のぼり」を紹介します。

本資料は真鯉で長さ5m80cm、最大幅1m15cm、口径41cmです。木綿の本体に彩色が施され、黒のベースに、所々に塗られた銀色の塗料が華やかです。頭部には「祝」の文字がデザインされています。榎本家からはこの他にも真鯉2点、緋鯉2点の計5点が寄贈されています。

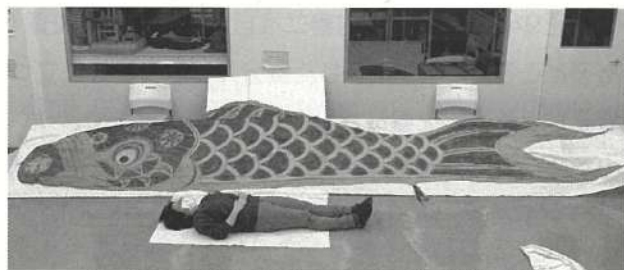
端午の節供に鯉のぼりをあげるようになったのは江戸時代後期とされていますが、その頃は真鯉1匹だけでした。後に、明治時代後半から大正時代にかけて緋鯉と対であげるようになります。童謡『こいのぼり』昭和6年(1931)

の歌詞で「大きい真鯉はおとうさん、小さい緋鯉はこどもたち」と歌いますが、発表された当時の緋鯉は男児を表しています。昔は一家の大黒柱といえば父親でしたが、今は父親とは限りません。現代のカラフルな色の鯉のぼりには、時代や家族観の変化が映し出されているかのようです。

(武蔵野ふるさと歴史館 学芸員 金成 紘子)



「鯉のぼり」の調査カード
調査結果の記載を目的とした調査カードは、資料1点につき1枚ずつ作成されます。寸法や特徴が記載されており現物を出さなくても資料の確認ができます。



目次

[収蔵資料紹介] 榎本家の「鯉のぼり」	1
成蹊学園取得地(吉祥寺)の開発経緯 - 成蹊学園取得後の地域形成期(大正8年(1919)~1920年代) -	2
関前村を支配した近世前期の代官たち	13
旧西久保村片井木家にみる明治後期から昭和前期の下肥汲取り状況	19
18世紀前半期における西久保村の変容	24
[令和5年度むさしの発見隊実施報告] きのみをさがして ~井の頭公園の今と昔~	31



マテバシイ



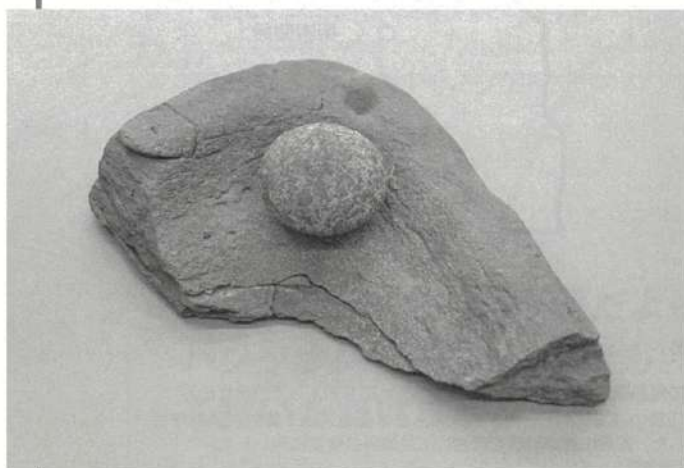
トチノミを探しているところ

考古学講座では、御殿山遺跡で遺跡とは何か説明し、今いる場所が遺跡であることを知ってもらった。参加者は足元に遺跡がある事を知らなかった様子で、新鮮な反応がみられた。その後、武蔵野公会堂で御殿山遺跡から発見された縄文土器・石皿・磨石・スタンプ型石器・凹石について解説し、触ってもらった。これらは植物の加工や調理に使用した植物加工具といわれ、例えば、石皿と磨石は組み合わせて堅果類や植物の根の製粉に使用したと考えられている。ドングリ・トチノミは今の井の頭恩賜公園にも生えており、実際に自然観察で見つけることができた。参加者は石器の重さやツルツルした手触り確かめ、興味津々であった。

講座終了後のアンケートによると、参加者の多くは自然や木の実に関心があって応募したようだった。しかし、参加者のうち13人が自然観察と考古学講座の両方を楽しめたと回答しており、興味を広げるきっかけとなったのではないかと。また、講座を見学した保護者から、木の実の特徴を知ることができたのでまた散策に出掛けたい、御殿山遺跡について知らなかったといった感想が寄せられた。講座終了後も、学びを親子で振り返ってもらえることが期待できる感触であった。

以上のように、本講座は自然観察と考古学講座をコラボレーションさせることで、参加者が関心をもたなかった分野に触れてもらうことを目標とした。参加者の当日の様子やアンケート結果を見る限り、目標を達成することができたのではないかと。また、従来の講座と比べてテーマを絞ったことで、内容を分散させずまとめることが

できた。このことが、参加者が土器・石器に興味をもってくれたことと、楽しかったという感想に繋がったと考える。今回、参加者の多くは歴史を学習していない3年生や、自然に興味がある者だったが、考古学講座と組み合わせたことで、体験的に歴史に触れてもらう機会になった。井の頭恩賜公園で行った従来の講座は歴史を扱っていない、または歴史の理解が難しいといった課題があった。本講座を通じて、参加者に御殿山遺跡を知ってもらえることができたように、来年度以降もこのような複数の分野に跨る講座では、難しい歴史を自分の関心に引き付けて体験的に理解してもらえよう検討していきたい。



御殿山遺跡から発見された石皿と磨石

